法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-07-16

<研究ノート>海量法師『臥遊編』所収「肥前四首」訳註稿

Hihara, Tsutae / 日原, 傳

(出版者 / Publisher)
法政大学人間環境学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
The Hosei Journal of Sustainability Studies / 人間環境論集
(巻 / Volume)
22
(号 / Number)
2
(開始ページ / Start Page)
33
(終了ページ / End Page)
40
(発行年 / Year)
2022-01-31
(URL)
https://doi.org/10.15002/00025511

研究ノート

海量法師『臥遊編』所収「肥前四首」訳註稿

日原　傳

はじめに

海量法師は江戸時代中期の真宗の僧侶である。字は宝器、また奉張。号は寒巌窟。俗姓は佐々木。近江国犬上郡開出今（かいで）村覚勝寺の第八世玄明の五男として、享保十八年（一七三三）八月十四日に生まれた。二十歳のとき得度。明和二年（一七六五）、歌を志して彦根城南の里根村に草庵を結ぶ。翌三年には江戸に出て賀茂真淵の門人となった。のち京で建部綾足にも学んでいる。兼ねて漢学もよくした。また、旅を好み、全国の名山・名蹟を訪れ、名士と交流した。文化十四年（一八一七）十一月二十一日、彦根石ヶ崎の廬を出て路頭に倒れ八十五歳で没したという。

海量の詩集に『臥遊編』がある。[1] 所収詩は計百七首。その配列は五畿（山城・大和・河内・和泉・摂津）七道（東海・東山・北陸・山陰・山陽・南海・西海）に分けられ、詠ずる国は四十二に及ぶ。「西海道」は筑前一首、豊前一首、肥前四首、肥後一首、薩摩二首の計九首で構成されている。肥前四首はすべて長崎を詠んだ作である。それを読み解くのが本稿の主旨である。

海量は寛政五年（一七九三）から十年にかけて郷里と長崎を数回往復しており、長崎滞在中には中国語や和蘭（オランダ）語を学んでいる。[2]

彦根藩中興の英主と称えられる第十二代藩主井伊直中（なおなか）は藩校を起こすに当たり、海量に諸藩の制度を調査させ、熊本の時習館の制度をもととして館規を定め、寛政十一年に「稽古館」を創設した。のち館名は「弘道館」と改められた。その藩校に海量が長崎で購入した稀書を献納した功績も指摘されている。[3]

〈第一首〉

遊長崎聖福寺題松月院（長崎の聖福寺（しょうふくじ）に遊びて松月院に題す）

聖福名藍遠問尋　聖福の名藍　遠く問尋す
憑高一院昼陰々　高きに憑りて　一院　昼陰々たり
松間明月窺禅味　松間の明月　禅味を窺ひ
嶺上浮雲伴道心　嶺上の浮雲　道心に伴ふ
滄海似杯当戸牖　滄海　杯の似く　戸牖に当たり
碧天如鏡映園林　碧天　鏡の如く　園林に映ず
眼中看尽三千界　眼中　看尽す　三千界
万籟渾為妙法音　万籟　渾て妙法の音と為る

【韻】尋・陰・心・林・音（下平十二侵）

【語釈】

聖福寺…長崎市にある黄檗宗の寺。山号は万寿山。日本に黄檗宗を伝えた隠元の孫弟子に当たる鉄心道胖を開山として、長崎奉行の後援や在崎唐人、鉄心の母の実家である地元の豪商西村氏の出資を得て、延宝五年（一六七七）に建立。

松月院…聖福寺にあった建物。鉄心が創建し、彼の死後、その墓塔や木像を安置したという。原爆によって倒壊した。

名藍……名高い寺。名刹。

憑高……高い処に據る。韋荘「婺州水館重陽日作」詩に「異国逢佳節、憑高独苦吟」とある。

一院……一つの寺。白居易「銷暑」詩に「何以銷煩暑、端居一院中」とある。

陰陰……しずかなさま。謝朓「直中書省」詩に「紫殿肅陰陰、彤庭赫弘敞」とある。

松間……松の木の間。盧綸「過楼観李尊師」詩に「犬吠松間月、人行洞裏花」とある。

禅味……禅宗の面白み。また、禅の趣味。白居易「題道宗上人十韻」詩に「清潔霑戒体、閑談蔵禅味」とある。

道心……仏道に帰依する心。張説「滬湖山寺」詩に「空山寂歴道心生、虚谷超遥野鳥声」とある。
滄海……あおうなばら。駱賓王「霊隠寺」詩に「楼観滄海日、門対浙江潮」とある。
戸牖……戸とまど。牖は壁にあけた窓。
碧天……あおぞら。『三体詩』所収の李郢「江亭秋霽」詩に「碧天涼冷雁来疎、閑看江雲思有餘」とある。
三千界…「三千大千世界」の略。
万籟……万物の響。常建「破山寺後禅院」詩（『三体詩』、『唐詩選』所収）に「万籟此俱寂、惟聞鐘磬音」とある。
妙法……たえなるのり。義理の深遠な仏法。

【試訳】

名刹である聖福寺を遠く尋ねてきた。
この寺は高い処にあって、昼もひっそりとしている。
松の樹間に上る月は禅定の妙趣を窺い、嶺の上に浮かぶ雲は仏道に帰依する心に伴う。
青い海は杯のさまを呈して寺の戸や窓に向かい合い、碧い空は鏡のように明るく境内の林を照らす。
三千世界を眼のなかで見尽くすことができ、すべての物音はみな妙なる法の音に聞こえる。

【余説】

・長崎大学附属図書館が公開する「幕末・明治期日本古写真超高精細画像」の「三八六九　長崎聖福寺」（http://oldphoto.lb.nagasaki-u.ac.jp/zoom/jp/record.php?id=3869）は明治中期頃の撮影と推定される。その解説によると写真中央の大雄宝殿の右上に見えるのが松月院だという。
・頸聯の「滄海似杯」は山に囲まれた長崎湾の形状を「杯」に見立てたのであろう。ちなみに、清の徐元文の七言律詩「登男崩峰」の頸聯は「鳥飛天外山如鏡、人至雲中海似杯」と「如鏡」と「似杯」が対句のなかで使われている。同じく、頸聯の「…当戸牖、…映園林」という表現は、『唐詩選』所収の祖詠「蘇氏別業」詩に「南山当戸牖、灃水映園林」のかたちで見える。

〈第二首〉

望天門山（天門山を望む）

蟠龍城上梵王台　　蟠龍城上の梵王台
西望天門山色開　　西に望めば　天門　山色開く
烟波明滅斜陽晩　　烟波　明滅す　斜陽の晩

千帆遥映玉欄来　　千帆　遥かに玉欄に映じ来たる

【韻】台・開・来（上平十灰）

【語釈】

天門山…天門峰。一名、観音山。長崎港口の右に屹立する秀峰。港口左にある小ケ倉山（子倉山）と相対して港口を扼する。

蟠龍……わだかまっている龍。柳宗元「行路難」詩に「蟠龍吐輝虎喙張、熊蹲豹躑争低昂」とある。

天門……天帝の宮門。『唐詩選』所収の沈佺期「龍池篇」詩に「池開天漢分黄道、龍向天門入紫微」とある。同じく『唐詩選』所収の李白「望天門山」詩に「天門中断楚江開、碧水東流至此廻」とある。

梵王台…仏法の守護神である梵天王のうてな。仏寺をいう。

山色……山の景色。山光。

烟波……もやのこめた水面。

千帆……多くの帆船。

玉欄……欄干の美称。

【試訳】

（山や丘が）龍がわだかまるように周囲をとりまく長崎の街のほとりに寺があり、そこから西方を望むと山が天の門のように開けている。

もやのこもる水面が夕日に照らされて明るくなったり暗くなったりするなか、たくさんの帆船が遠くからこの寺の欄干に向けてその姿をあらわしてくる。

【余説】

・長崎君舒の「長崎十二景」のなかに「天門飛帆」があり、「神崎と小ケ倉の二山を港口の門に見立てた。神崎の背後の山を天門峰と呼ぶ」と説明する。他の十一景は「瓊山梯斗」「蛮楼凄笳」「華舘笛風」「斗峰螺髻」「雄浦款乃」「山橋樵雪」「緑湾凝烟」「港泊画舫」「渚翻鷺鷗」「平江棹月」「鳴瀧浣花」である。[4]

・融思の「長崎湊八景之図」の中に「天門帰帆」が見える。他の七景のうち五景は「瓊嶺暮雪」「蛮楼夕照」「眉山秋月」「聖徳晩鐘」「稲水落雁」であるが、二景は欠字になっている。[5]

・長崎湾口の「天門山」を詠みこんだ詩として、大田南畝「瓊浦秋望」詩がある。「天門山断海門開、岸上人煙擁鎮台、処々白雲飛不止、秋風一片布帆来」と「天門山」の三字を冒頭に据えて詠まれている。[6]南畝は文

化元年（一八〇四）六月に長崎奉行所詰を命ぜられ、七月二十五日に江戸を発って長崎に向かう。旅の途中で病気になり、長崎に着いたのは九月十日であった。その後も一ヶ月ほど寝込み、奉行所に出勤したのは十月十八日になる。翌年十月十日まで長崎で勤務した。

・この詩の転句の平仄は今体詩の規則にあっていない。

〈第三首〉

遊春徳寺（春徳寺に遊ぶ）

瓊丘烟景満祇林　瓊丘の烟景　祇林に満つ
欲避塵紛此一臨　塵紛を避けんと欲して此に一臨す
窺牖白雲来嶺上　牖（まど）を窺つて　白雲　嶺上より来たり
聞経鳴鳥集庭陰　経を聞きて　鳴鳥　庭陰に集まる
世情長隔幽人坐　世情　長く隔つ　幽人の坐
法味相偕孤客心　法味　相ひ偕（かな）ふ　孤客の心
更憶虎渓閒月興　更に憶ふ　虎渓閒月の興
晩来分手下青岑　晩来　手を分かちて青岑を下る

【韻】林・臨・陰・心・岑（下平十二侵）

【語釈】

春徳寺…山号は華岳山。京都建仁寺末寺。もとは岩原郷にあった。寛永七年（一六三〇）に幕府から書物改の職を命ぜられた泰室清安が滞留した当時は、大梅山春徳寺と称していた。慶長十九年（一六一四）に破却された切支丹寺（トードス・オス・サントス教会）旧趾である現在地に寛永二十年に移転した。[7]

瓊丘……長崎の街を囲む丘。「瓊浦」「瓊海」は長崎の異称（『東藻会彙地名箋』）であり、「瓊丘」も長崎の異称として用いられているのであろう。

烟景……かすみに包まれた景色。

祇林……祇陀太子の園林。転じて、寺をいう。

塵紛……俗世のわずらわしさ。

嶺上……峰上。白居易「嶺上雲」詩に「嶺上白雲朝未散、田中青麦早将枯」とある。

世情……俗世間の趣。陶潜「辛丑歳七月赴仮還江陵夜行塗口」詩に「詩書敦宿好、林園無世情」とある。

幽人……俗世間をすて、人里離れたところで暮らしている人。『唐詩選』所収の韋応物「秋夜寄丘

二十二員外」詩に「山空松子落、幽人応未眠」とある。

法味……仏教のおもむき。妙法の滋味。梁・昭明太子「同泰僧正講詩」詩に「已知法味楽、復悦玄語清」とある。

虎渓……江西省九江県廬山の東林寺の前にある渓川。ここは「虎渓三笑」の故事を用いている。廬山の東林寺に住む高僧慧遠はふだんは虎渓の手前で見送る人と別れたが、陶淵明と陸静修を見送った時、つい話に夢中になって虎渓を渡ってしまい、気づいた三人が大笑いをしたという話がある。

閒月……静かに照る月。『唐詩選』所収の釈霊一「僧院」詩に「虎渓閒月引相過、帯雪松枝掛薜蘿」とある。

晩来……日暮れ方。夕方。

分手……人と分かれる。

青岑……青い山。唐・劉滄「留別山中友人」詩に「秋尽書窓驚白髪、晩衝霜葉下青岑」とある。

【試訳】

この寺にはかすみに包まれた長崎の美しい景色が満ちており、俗世のわずらわしさを避けてここにやってきた。

白い雲は嶺の上から降りてきて窓を窺い、鳴く鳥は庭の陰に集まってお経を聞いている。

俗世間の情に染まって、長いこと隠士の座から離れていたが、（ここで触れた）妙法の滋味は孤独な旅人である私の心にかなうものだ。

渓川に上る静かな月を見ると慧遠たちが虎渓をうっかり渡って大笑いした話が思われる。

日が暮れたので、寺に別れを告げ、この青山を下ることにしよう。

【余説】

・頸聯は倒装法を用いている。

・語釈に引いた釈霊一の七言絶句「僧院」は『唐詩選』の掉尾に置かれた作である。「虎渓閒月」という措辞が共通しており、海量が釈霊一の詩を踏まえていることは明らかだろう。

〈第四首〉

扇嶌（扇嶌）

扇嶌翩々百尺旌　扇嶌　翩々たり　百尺の旌

紅毛旅館映波明　紅毛の旅館　波に映じて明らかなり
遥看画棟珠簾裡　遥かに看る　画棟珠簾の裡
緑眼胡児吹玉笙　緑眼の胡児　玉笙を吹くを

【韻】旌・明・笙（下平八庚）

【語釈】

扇嶌……長崎の出島。江戸幕府の命を受けた長崎の富商二十五人によって寛永十二年（一六三五）に造成された扇形の島。はじめはポルトガル人を収容したが、十六年にその来航が禁止され、十八年に平戸にあったオランダ東インド会社日本商館をここに移した。頼山陽「長碕謡（ながさきよう）十解」其五に見える「扇洲楼下盪桨遅、碧檻紅灯閃玉巵」の「扇洲」も出島を指す。

翩々……旗のひるがえるさま。

百尺……高いこと。

紅毛……オランダ人。

旅館……はたごや。ここでは、オランダ商館を指す。

画棟珠簾…彩色を施した棟木と玉のすだれ。立派な家をいう。『唐詩選』所収の王勃「滕王閣」詩に「画棟朝飛南浦雲、朱簾暮捲西山雨」とある。なお王勃詩の「朱簾」は「珠簾」に作るテキストもある。

緑眼……胡人の眼をいう。碧眼。岑参「胡笳歌送顔真卿使赴河隴」詩に「君不聞胡笳声最悲、紫髯緑眼胡人吹」とある。

胡児……北方のえびすの児童。ここでは、オランダ人を指すのであろう。「胡」は西方の異民族の総称。

玉笙……玉で飾った笙。美しい笙。

【試訳】

扇形をした長崎の出島には、高々と旗がひるがえり、オランダ商館が波にはっきりと映っている。

はるかに見えるのは、その彩色をほどこした建物の中で、緑色の眼をした異人が笛を吹く姿だ。

【余説】

・大田南畝に「和蘭（オランダ）館」と題する出島のオランダ商館を詠んだ詩があり、「紅白旗飄百尺竿、崑崙奴僕役和蘭、鋪氈且勤茴香酒、歩屧閑過花薬欄」と高く掲げられた旗がなびくさまが詠まれている。[8]

・『長崎港草』の「紅毛庫（オランダヤシキ）」の説明に「胡人ノ風俗昏暁笳笛ヲ吹鳴ラシ互ニ音信ヲ通ズ、其声悽切ニシテ尤悲

シ、聞モノ心ヲ傷マシメ懐古ヲ動カス題シテ曰扇嶼悽茄、十二景ノ一ナリ」とある。[9]

註

（1）富士川英郎・佐野正巳編『紀行　日本漢詩　第一巻』（汲古書院、平成三年）に影印を収める。底本は、国会図書館所蔵本。海量の歌集『ひとよはな』に付されたもの。

（2）森銑三「海量法師」（『森銑三人著作集　第二巻』中央公論社、昭和四十六年）。

（3）村山吉廣『藩校　――人を育てる伝統と風土――』（明治書院、平成二十三年）。
佐野正巳「解題」（富士川英郎・佐野正巳編『紀行　日本漢詩　第一巻』汲古書院、平成三年）。

（4）『長崎名勝図絵（長崎文献叢書　第一集・第三巻）』（長崎文献社、昭和四十九年）。

（5）越中哲也註解『長崎古今集覧名勝図絵（長崎文献叢書　第二集・第一巻）』（長崎文献社、昭和五十年）。

（6）『大田南畝全集　第四巻』（岩波書店、一九八七年）三九六頁。

（7）『長崎名勝図絵（長崎文献叢書　第一集・第三巻）』（長崎文献社、昭和四十九年）二一頁。また、『長崎市史　地誌編名勝舊蹟部』（清文堂、昭和十三年）八三七頁。

（8）『大田南畝全集　第四巻』（岩波書店、一九八七年）三五二頁。

（9）『長崎港草（長崎文献叢書　第一集・第一巻）』（長崎文献社、昭和四十八年）。